

最強の歴戦ガンブレード  
ドマスターに平穏な生  
活を…！

おくと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦いの末、子供かばって死んだ。男は、平穏な生活を送るために転生するが…

# 目次

N O. 1	転生	1
N O. 2	大物ルーキー	6
N O. 3	キャベツ栽培	24
N O. 4	カズマと合流　そして魔女	32
N O. 6	調査完了て、…ええ…な件	46
N O. 7	ポジション騒動	65



1  
No. 1 転生

俺の名は レン・ヴァーフアイト

享年53

若い頃ころから傭兵をして経験をつみ30でガンブレイドマスターになったその後  
いろんな戦争とかに巻き込まれ後進に務めるため学園の教師になった数年 俺は死ん  
だ：死因は刺し違い目が覚め手を見ると：若返っていたらしい

レン「：どうなつてんだ？ 服装は死んだときのまま」

黒いアイディアル・ボディガードコートだ

レン「どうなつてんだ！」

「落ち着いてください」

レンは声をする方を向く椅子に座つた女性がいた

レン「誰だ？ あんたは？」

？「とりあえず座りなよ」

レンはとりあえず座る

？「それでは自己紹介しよう：私は女神の：て、」

するがレンはスマホをいじりだす

? 「人が話している時にスマホはいじらない!」

と取り上げられる女神となのる女性はスマホに書かれた投稿をみる

女神と自称する頭のイカれた女に拉致られた上に若返らせられました誰か助けてく  
だ…

? 「…何これ?」

レン「ハ●シユタグだ 事実を書いたまでだ…そもそも俺は神なんてもの信じねえ  
し」

? 「そうなんですね…とりあえず私はーといえます」

レン「ああ…強行していくスタイルね わかりません」

? 「とにかく あなたには2つ道があります」

レン「?」

? 「このまま成仏するか…異世界に転生するかです」

レン「…なあ…その前にいいか?」

? 「?」

レン「おれの生徒は生き延びているか?俺はあいつらを守れたのか?」

? 「…はい…貴方が庇った子も全員」

レン「そうか…ふむ…あんた女神なんだろう？」

？「え、ええ」

レン「そいつらに伝言頼めるか？」

？「大丈夫ですが、」

レン「そうか…なにか書くものをくれ」

女神は紙と鉛筆をわたすとレンは手紙を書く

レン「これでいい 死後届くようになっていたという設定で頼むぞ」

と女神に手紙をわたす

？「大事な子たちなんですわね」

レン「ああ…俺には嫁さんも子供もいなかったからなというか、いろいろあつて婚期逃した…まあ…転生する方向でいいか…あの世に行っても暇だし」

？「ではそうしますね あ！あと特典がつくので」

レン「特典？」

？「はい 最強の武器とか防具とか」

レン「ふん…それ以外でもいいか？」

？「構いませんが」

レン「じゃあ俺の愛用品で」

? 「ガンブレードとバイク、あの銃2つとリローディングツールですか?」

レン「御回答〜!できる?」

? 「でも一つしか行けないと上が決めてるんです…」

レン「おい俺は愛用品と行っただけで一つと入ってないぞ?」

? 「(この人せこい!)」

レン「それに向こうだと材料とかあんのか?」

? 「ないですね…」

レン「だろ?」

? 「愛用品にしますね」

そうすると愛用品がいくつか出てくる

バイクの脇にガンブレードをしまうラッチがあり前輪はタイヤが2つ後輪は3つと  
なっている。そして後ろにリローディングツールをつむ 銃はリボルバーで胸のホル  
スターにしまう

レン「頼む」

女神は両手をレンに立っている床にかざした。すると床には青い魔法陣が映し出さ  
れ、レンの周りが半透明な青い壁で覆われる。

? 「君が魔王を討ち取る勇者となれることを祈っているよ……君の異世界冒険者生活



に祝福を」

レン「短い間だが、世話になったな」

女神は笑い　そしてレンは天へと昇っていく

レン「それにしてもバイクごと中に浮かぶのは少し違和感あるな（正直これ、平穩には必要ないと思うが…魔王か…ならいるか…）はあく　また死合うのかあく」

## No. 2 大物ルーキー

レン「あ？」

と気づけば街の中周りの建物は赤屋根に茶色いレンガ

レン「懐かしいな…故郷もこんなだったけ…」

と感傷に浸る…カスタムしたバイクのハーディルデイトナにまたがりながら来たがバイクを知らないこの世界の人たちはバイクに乗るレンをまじまじと見る

レン「とりまここ離れるか…すまない…ギルドはどこだ？」

町人「こ、この先を左折したさきだ」

町人は狼狽しながら言う

レン「そうか…礼を言う」

といて走らせるそうしてギルドへ

「こんにちわー。どういったご用件で？」

レンはカウンターに歩み寄り

レン「冒険者になるために登録を…」

「冒険者志望の方ですね。それでは、登録手数料の千エリスをお支払い願えますか？」

レン「……そうか…（たとえば金はないどうするか…うん？）」

レンはポケットを弄るとなにかのメダルがでる

レン「これでいいか？」

「はい……」

レンはこれで無一文となる

レン「まあ何かと向こうでも金欠だったな…いや…ただ巻き上げられてただけか？」

「ではまず、この冒険者カードについてご説明します」

受付嬢は古びた紙に見えるカードを手に受付から出し、レンにわたす

「このカードは、冒険者の身分証明書となるカードです。冒険者には必ずこれを所持してもらおうよう義務付けられています。このカードがなければクエストを受けることはできません。またこれには、冒険者カードには様々な情報が記載されており、冒険者様の名前からレベル、職業、ステータス、所持スキルポイント、習得スキル、習得可能なスキル、冒険者になってからの経過日数、過去に討伐したモンスターの種族、数などが自動的に更新され、表示されます。そして偽造は禁止しておりますのでご注意ください。また、紛失された場合はギルドに申し出てください。お金はかかりますが、再発行いたします」

レン「これは、便利だな」

「全てのモンスターには魂が宿っており、人はモンスターを倒せばその魂を吸収し続けます。そして、ある一定の量まで吸収したところで、人は急激に成長することがあります。これを俗にレベルアップと言います。レベルを上げるとスキルポイントがたまっていき、こちらを消費することで新たなスキルを覚えることができます。なお、素質次第ではレベルの時点で多くのスキルポイントを取得できます。新たにスキルを獲得する際には、冒険者カードを操作し『習得可能スキル一覧』に出ているスキルを押してください……ぼ、冒険者カードについての説明は以上です」

レン「…（わけがわからん…）」

「……えーつと……では、まずこちらの書類に必要事項を記入していただけますか？」

レンはとりあえず必要事項を書く

「はい、お名前は……レン様ですね。ではお次に、こちらの水晶に手をかざしていただけますか？」

受付嬢は、カウンターに置かれていた水晶の下に冒険者カードを置いた。綺麗な水色に輝く水晶の周りには、見たこともない機械が取り付けられている。

レン「これに手をかざすのか？」

「はい、そうすればステータスの測定ができます」

レンが手をかざすと水晶はひとりでに輝き出し、周りについていた器械が動き始めた。そして、下に置いていた冒険者カードにレーザーを放ち始め、この世界の文字を記していく。

カードには、自身のなまえとステータスがレーザーにより記され続けて文字を記し始める。

「なっ！なんですか!?!このステータスは?!」

レン「?」

すると突然、受付嬢が大声を出して驚いた。彼女はカツと目を見開き、食い入るようにな作成途中の冒険者カードを見つめている。ギルド内にいた冒険者達がカウンターへ顔を向けると、何事かと集まってきた。

「どうした?どうした?」

「何か問題でもあったか?」

「問題なんてもんじやないですよ!筋力 魔力、知力、器用、俊敏性……運のステータス全てが、大幅に平均値を超えています!特に 筋力 魔力、知力、器用ていうかこんな極めて高い数値です。こんなの初めて見ました! それに見たこともないスキルがいくつもあります!」

レン「…」

「マジかよ！ こりやスゲエな！」

「すげえのがきたな」

「魔王討伐の日は近いかもな！」

「このステータスなら、最初から上位職は勿論のこと、どんな職業にだってなれますよ！  
アークプリースト、アークウィザード、クルセイダーだって！」

レン「そうか…とりあえず落ち着いてくれ」

「申し訳ありません つい」

あまりの高ステータスを見て興奮を抑えきれないでいた

レン「職業なんだが」

「はい」

レン「…ガンブレイドマスターで頼む」

「ガンブレイドマスターですね！ タンクの上位職でありガンブレイカーのそう上、強力な技で立ちで立ち回り仲間を守りながらガンブレイドで切り伏せるスペシャリスト！

装備もあるんですか？」

レン「ああここにな」

と背負ったガンブレイドをみせる

そうして 登録を終える

レン「…クエストは受けられるか？」

「はい 討伐でしたら これなんかどうですか？」

(3日でジャイアントトード討伐)

レン「じゃあそれで」

「わかりました パーティーはどうなさいますか？」

レン「必要ない」

「ええっ!? ソロで行かれるのですか!？」

レン「ああ」

周りにいた冒険者達も驚愕し、中には呆れている者もいた。

「オイオイあんちゃん……素質が高いつて知って舞い上がる気持ちはわかるけど、そいつは流石に身の程知らずつてヤツだぜ？」

「ここは、まずは仲間と一緒に行くのがセオリーというもんだぞ？」

「なんなら私達のパーティーくむ？」

レン「悪いが遠慮しておく、いつかは一人でなんとかしないといざつて時に動けなくなる…それに優秀な先輩方のパーティーメンバーがいると甘えがでる。だから ソロでいい 心配なさつてくれる先輩方ありがとうございます」

とやんわり断る

「し、しかしソロは危険では」

レン「ヤバかったら逃げる」

「わかりました」

そういつてクエストを発行する

そうして草原へ

レン「でかいカエルだと聞いたが…本当にでかいな…」

ガンブレードを肩に担いだレンの前にはでかいカエルことジャイアントトードがいる。ジャイアントトードはレンを丸呑みにしようとする舌を伸ばすがレンは、それを紙一重で躲す

レン「温厚であるが繁殖期はあれるのか、こいつに恨みはないが…あれ試すか」

とガンブレードを構える

（連続剣！）

効果…スキル4から6連射できる

レンはジャイアントトードのもとに走ると高速で5回連続で斬りつけると、ジャイアントトードは倒れる

レン「よし？」

（レベルアップしました！連続剣を覚えました。）



## ※連続剣IIコンボ

レン「へえく使った技がスキルとして完全に覚えるのかフム…

ジャイアントトードはまだいるな…とりあえず一個ずつ確実にやるか！」

(キーンエツジを覚えました！)

効果…対象に小威力の物理攻撃

レン「次だ！」

(ノー・マーシーを覚えました！)

効果…一定時間、自身の与ダメージを20%上昇

レン「よし！次はバフだ！」

(ブルータルシエルを覚えました！)

効果…自身のHPを回復し、自身に一定量のダメージを防ぐバリアを張る。また回復

量の100%分のダメージを軽減する。

レン「バフは大事！絶対！」

(カモフラージュを覚えました！)

効果…一定時間、自身の受け流し発動率を50%上昇させ、かつ自身の被ダメージを

10%軽減させる。

レン「これは必要だ！…多分…使った記憶が曖昧だ」

(デーモンスライスを覚えました！)

効果…：周囲の敵に向け小威力の範囲物理攻撃

レン「丁度いい 全体攻撃だ！」

(ロイヤルガードを覚えました！)

レン「こんなのあったっけ？…ん？なんか寒けするなこの効果」

効果…：戦闘中の敵から自身に向けられる敵視を非常に大きく上昇させる。

(サンダーバレット ウィンドバレット ライトバレット フレイムバレットを覚えました！)

効果…：対象に属性を付与した遠隔物理攻撃

レン「属性攻撃か牽制に使えるな」

(デンジャーゾーンを覚えました！)

効果…：対象に中威力の物理攻撃

レン「えくと 何これ？」

(ソリッドバレルを覚えました！)

効果…：対象に小威力の物理攻撃 コンボ時ダメージ増加

レン「よく使ったな」

(バーストストライクを覚えました)

効果…対象に中威力の物理攻撃

レン「覚えには覚えたような記憶があつたかな？」

(ネビュラを覚えました！)

効果…自身のんだダメージ30%軽減

レン「…???これはわからん！」

(デーモンスローターを覚えました！)

効果…自身の周囲の敵に小威力の範囲物理攻撃 コンボ時ダメージ増加

レン「こんなのあつたんだ」

(オーロラを覚えました！)

効果…対象の体力を継続回復させる

レン「こいつにはよく助けられたな」

(ボーンライドを覚えました！)

効果…自身のHPを1にするが、効果中、自身への一部を除くすべてのダメージを無

効化する。

レン「これとオーロラ乱用したなあゝ若い頃…あ 今も若いのか…」

(ソニックブレイクを覚えました！)

効果…対象に中威力の物理攻撃また、継続ダメージを付与する。

レン「面倒臭いとき使ったな」

(ラフディバインドを覚えました！)

効果…対象に飛び掛かりつつ小威力の物理攻撃。

レン「不意打ちにはこれだ！」

(ビートファンングを覚えました！)

効果…対象に中威力の物理攻撃。

レン「こんなの使ったことねえ」

(サベツジクロウを覚えました！)

効果対象に中威力の物理攻撃

レン「連続剣に混ぜたらいいかもな」

(ウイケツドタロンを覚えました！)

効果…対象に高威力の物理攻撃。

レン「これも混ぜるか」

(バウシヨックを覚えました！)

効果…自身の周囲の敵に小威力の範囲物理攻撃

レン「ちょうどいい」

継続ダメージを付与

(冷刃を覚えました！)

効果…：氷属性の高威力遠距離攻撃

レン「垢まみれの技が来たなこれからまたお世話になるな」

(ハート・オブ・ライトを覚えました！)

効果…：自身と周囲のパーティメンバーの被魔法ダメージを10%軽減させる。

レン (魔法系のバフかあゝ)

(ハート・オブ・ストーンを覚えました！)

レン「罠を作れるな組み合わせようくん擬似的タンクをつくれるか？」

(コンティニューエーションを覚えました)

効果…：対象にへの追撃攻撃を行う。

レン「連続剣を連続させるのか？これは？」

(ジャギユラーリップを覚えました！)

効果…：対象に小威力の物理攻撃。

レン「これも連続剣限定かあ」

(アブドメンテアーを覚えました！)

効果…：対象に小威力の物理攻撃。

レン「これも…てかまた？」

(アイガウジを覚えました！)

効果…対象に小威力の物理攻撃。

レン「また?!うーん使わないなかぶるやつは…」

(フェイテッドサークルを覚えました!)

効果…自身を中心に周囲の敵に中威力の範囲物理攻撃。

レン「不意打ちされたか…包囲されたときに突破するのにつかつたなあ」

(ブラッドソイルを覚えました!)

効果…連続剣の回数を上げる

レン「これはいい!」

(ブラステイングゾーンを覚えました!)

効果…全体に高威力物理攻撃

レン「こいつは切り札の一つだったな!」

(アルテマバレットを覚えました!)

効果…無属性高威力物理攻撃

レン「こいつは…やめておこう」

(エンド オブ ハート を覚えました)

効果…敵単体に無属性超極大物理攻撃

(リボルバーマキシマムを覚えました!)

効果：敵単体に炎属性の極大威力攻撃

(ブラスティングドライブ覚えました！)

攻撃：敵全体に氷属性の極大威力遠距離効果

レン「まだだ！もつとだ！」

3日後

レン「これで全盛期の技はコンプリートしたか…三日も寝ずにやりやできるか でもこれはバンバン出せないなあ…これ全部うったら間違えなく死か まだ体はガキだから無理は禁物か…何匹倒したんだろうか？ん」

ジャイアントトードの屍が多く転がっている

レン「やりすぎたか？とりあえずギルドに戻るか…」

そういつてハーディィデイトナの脇のガンブレード用の鞘がついたラッチにガンブレードをしまい、ハーディィデイトナにまたがりギルドに向かう

レン「とりあえずついたが(視線が…)」

そういつてガンブレードを抜き鍵をとる

盗まれる心配こそないなぜならこいつを動かすには魔力が必要であるからだが、用心に越したことはない

ギルドにもどると

「おおお！おかえりあんちゃん」

「その様子だと一匹もむりだったか？」

レンはまっすぐ受付嬢のいるカウンターへ

レン「報酬を頼めるか？」

そういつてギルドカードを差し出す

「分かりました」

そういつてカードをみる

「?!150?!」

ギルドにいた人間全員驚愕する

レン「…」

「嘘だろおっ?!」

「インチキじゃないのか?!」

レン「三日間寝ずにやったんだ そのくらい いつてるだろ？」

「三日間でそんなにいくのか?!」

レン「それで？報酬の方なのだが？」

「あの 実は討伐したモンスターを買取金額も含まれておりまして、回収をギルドが終えるまでは、報酬の方をお渡しすることができません」



レン「そんなのか」

受付嬢「そうなんです」

レン&受付嬢「…」（バン！）

レン「それを先に言え……！」

レンはカウンターに手を叩きつける叩きつけられた部分はレンの手のひら型に凹む

受付嬢「も、申し訳ありません！」

レンは不機嫌に

レン「入ったら教えろ」

と言い残しギルドをあとにする

レン「どうしたのか…」

と頭をかく 現在無一文どうしたものか…

レン「（とりあえず宿に行つて交渉だ！）」

そういつてハーディー||デイトナに跨り宿へ

宿を探すうちに夕方になってしまった

宿主「いらつしやい」

レン「とまりたいんだが」

宿主「あいよ 30エリスだ」

レン「すまないが今際払えない」

レンはそう言うのとギルドカードをみせる

宿主「なるほど…結構な額はいるのかい？」

レン「ああ…泊めてくれたら3倍の90エリスだす…」

宿主「…」

レン「…」

宿主「わかった、今回は特別だ」

レン「悪いな」

そういつて部屋へ移動する

レン「とりあえず寝床はいいとして（グウー）飯だな…」

レンは体中のポケットを弄る、

レン「！これは!？」

飴玉とビーフジャーキー2枚

レン「これでのりきれと…?!（グウー）是非もなし！（とりあえず人かけらずつ食って噛みまくるそんなでもって満腹中枢を…!）」

と食ベきる

レン「こんなもんで腹が膨れるわけないわな…（グウー）…寝よ…」

そうしてふて寝する

## No. 3 キャベツ栽培

俺の名は

レン ヴアーフアイト (18才)

職業 ガンブレーカー

とりあえず…宿住まいしている 例の3倍の支払いの件は済んで、一応棚ぼたでちよいりツチであるが…一番耐えれないことがある…この前のいくつかのクエストで、ドラゴンと巨大なサンドワームを倒した…それが原因でどこかの誰かが広めたか知らないが獅子奮迅のような様であつたことから

「よう！黒獅子」

「黒獅子さんこの前のクエストありがとよ」

「黒獅子俺の代わりにorz(無言パンチ)」

レンには(漆黒の獅子)という2つ名ができたことにより縮まで、黒獅子と呼ばれる成りたて冒険者「黒獅子さん！あの最初のクエストは…」

レン「暴れうさぎにしとけ…そろそろ発情期だから気が立ってるしさあまりむれることもないからいいぞ」

※暴れうさぎでなに？ 角のあるうさぎです

成りたて冒険者「わかりました！」

レン「ああ〜ちゃんとレンで名前あんのに〜（恥ずかしい）」  
とギルドの椅子に座り頭をつける　すると前席に女性が座る

レン「クリスかあ〜？」

クリス「あつたり〜よくわかったねえ」

レン「嫌でもわかるお前のまいた噂のせいでちゃんと呼ばれなくなつたんだぞ〜？」

クリス「あははは〜その件に関してはごめんね」

レン「…（|| ||）」

クリス「そ　そうだ！今日お願いがあつてきたんだ！」

レン「これ以上俺をおとしめる気か？」

クリス「そんなことはないよ」

レン「あーそ…」

クリス「クエストのパーティー組みたいのうちタンク職いなくて」

レン「ほか当たれ」

クリス「いるにはいるけど…その…」

レン「…ひどいのか？」

クリス「そうじゃないんだけど……その痛めつけられるこ……」

レン「！わかった！あいつか！まあとりまクエストの件リヨっす！そーいや……この前  
下着取られてたけどあれは誰だ？」

時は少し前に遡る。

クリス「カズマてひと 彼となんかあつたの？」

レン「いや〜少し似てるなど思つて」

すると招集の警鐘がなる

緊急クエストが発行された

レン「なんだ？」

クリス「緊急クエストの招集だよ」

レン「緊急クエスト？ 襲撃か!？」

クリス「言つてなかつたっけ？ キャベツよ」

レン「……は？」

クリス「ほら行くよ！」

レンはクリスに連れられアクセルの正面ゲートへ

木でできたカゴを何故か抱えている上から下まで青い女と冒険者たちがいた

レン「キャベツなんてどこにもい……」

クリス「上だよ」

レン「バカ言え…キヤベツが飛ぶわけ…飛んでる!?だと!」

見上げると雲のように見えていたのは、敵の群衆、それらは虫のように舞いながら、こちらへ向かってきていた緑色のモンスター。

「キヤベキヤベキヤベキヤベ…」

カズマ「なんじゃこりやあああああああああああつ!?」

レン「なんで空飛んでんだよ…キヤベツがよ!バ●スしたらあれおちるか?」

冒険者「収穫だあああああああああああつ!」

冒険者「マヨネーズ持つてこーい!」

空飛ぶキヤベツ達が目前に冒険者達は大声を上げて一斉にキヤベツ目掛けて走り出した。

カズマ「どつかで見た光景だなあくコミケ?」

受付嬢「みなさーん! 今年もキヤベツ収穫の時期がやってまいりましたー! 今年のキヤベツは出来がよく、一玉の収穫につき一万エリスです! できるだけ多くのキヤベツを捕まえ、この檻におさめてください!」

冒険者たち「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!」

カズマ「いやちよつと待つて!? なんでキヤベツが飛んでんの!」

青い女「カズマ、この世界のキャベツは……飛ぶわ。味が濃縮してきて収穫の時期が近づくと、簡単に食われてたまるかとばかりに……街や草原を疾走する彼らは大陸を渡り、海を越え、最後には人知れぬ秘境の奥で、誰にも食べられず、ひっそりと息を引き取ると言われているわ。それならば、私達は彼らを一玉でも多く捕まえて、美味しく食べてあげようってことよ！」

カズマ「……俺、もう帰って寝てもいいかな？」

レン「一個1万なら……50こで……よしやるか……」

レンは城壁にあがると人間とは思えない跳躍力で城壁から飛んでいった。

カズマ「なんでっ！俺がっ！こんなことをっ！」

ジャージ姿の新米冒険者であるカズマは、文句を言いながらもキャベツを回収していた。

「おい！あれ！」

「オイ！あそこにいるのって……！」

「ま、間違いねえ！黒獅子だ！」

「(やつぱり……！)」

レン空中を蹴るとそれなりの高度へキャベツがレンを囲むそしてトリガーを3回引く



レン「ブラステイング…ドライブ！」

周りの大量のキャベツが一気に氷つき次々地に落ちる

レン「クリース！回収よろ！」

と叫ぶ

クリス「がってん！」

カズマは一時的に腕をとめて、空中でキャベツを凍結させ落としているレンのその姿がよく見える位置に移り観察する。

カズマ「（…かなりのイケメン…！）」

現にギルド内でも女性冒険者にも人気がある…

カズマ「（めぐみんの爆裂が使えたらな…）」

レンに直撃させてやりたいとカズマは思う。

レンのもつガンブレードをチート武器なのかとカズマは推測する。

カズマ「本当せこいな…」

めぐみん「カズマ！ 噂になっていた冒険者が！」

カズマ「ああ、俺も初めて見た。どうせチーターだろ…」

レン「さて…デモンストレーションはこの辺しとくか…ここからは確実に落とすか…

冷刃…」

レンは自身に次々向かって来るキャベツを避けと冷刃でキャベツを凍結させ落とす  
レン「せい！クリス！落ちたぞ！」

クリス「はいはい」

攻撃するたびにトリガーを引きそして回るリボルバー機構そしてハンマーが下りる  
たびに青く光る刀身そして卓越した動き攻撃性の高いキャベツが何匹も彼に向かつて  
突撃するも…彼は表情を崩さずに一匹一匹確実に対処する

カズマ「すげえ…ん？いた！なんだ？キャベツ？」

上から凍ったキャベツが落ちてきた

レン「すまん！詫びにお前の周りに落ちてるキャベツ持っいいいから」

カズマ「お　おう…」

チート武器でもなく…早く…そして強い…おそらく彼の剣さばきは誰が見ても見惚  
れるだろう。そうしてキャベツたちがいなくなるのを確認すると、一気に滞空していた  
高さから急降下して下りる。そこにクリスが近づくと

クリス「お疲れ〜」

レン「そつちも…換金のほう頼む45%くらい持っいいいから」

クリス「わかった」

レン「なんだろう…俺の第六感が逃げると叫んでいる…」

レンは後ろを見る二人のもとに何故かボロボロになっていいる鎧を纏った金髪の女性  
がこちらにやってくるのが見えた。

レン「あと任せた！」

クリス「ちよっ！レン！ダクネス!?!」

レン逃走！

レンは逃げ切るとふと思う

レン「あー肉●商店の牛カルビ丼食いて〜」

スキル「天上天下唯我独尊」を覚えました

効果 すべてのmpを消費して上位スキル連発…

デメリット mpが底を尽きると自動的に睡眠状態へ移行する

## No. 4 カズマと合流 そして魔女

レンはダクネスから逃走後

ギルドマスターに呼び出された

ギルマス「君にクエストの依頼をしたい」

レン「なんの？」

ギルマス「砂漠地帯の遺跡の調査に行ってもらいたい」

レン「墓泥棒ですかい？」

ギルマス「もつとオブラートにつつめんのか？」

レン「同行者といんすか？ワン〇〇スのロ〇ンとか？」

ギルマス「いないけどどうか誰なんだいそれ？」

レン「じゃあ同行者は？」

ギルマス「盗賊職の、クリスに任せてある」

レン「りよす」

そういつて一通り話をつけて酒場へ行くとクリスがいた

クリス「遺跡調査の話？」

レン「ああ…明日から頼む女神様…」  
クリス「!?」

レンは笑いウインクする

レン「アーティファクトの回収お疲れ様」

クリス「な〜んだ…バレれてましたか」

レン「転生前であつた女神と気配が見せたからなピンと来たんだま俺はそのことでお前にどうこうしろという気はないけどな」

そう言つてレンは煙管をふかす

クリス「レンで、喫煙家なんだね」

レン「いや…これは、葉だ喘息持ちでねその吸引が煙管というだけだ」

クリス「へー」

レン「今は収まっているがいつ再発するかわからんな…それでこそ戦闘中なら尚更だ…迷惑なら申し訳ない」

そういつて口から水蒸気の煙を吹き出す

クリス「いいや…匂いはしないから普通かな」

レン「まあ…しないようにこつちの世界の物で調合したからな…」

クリス「以外に器用だね」

レン「なあ…俺の娘は…どうなったんだ…」

クリス「貴方の跡を引き継いでガンブレードマスターになったわよ」

レン「！そうか…そうか」

レンは手で目を隠す

ダクネス「クリスじゃないか」

クリス「あつ、カズマ。それにめぐみんとアクアさんも」

レン「知りあいか？」

クリス「うん、茶髪の子がカズマで、魔法使いの子がめぐみん。残る一人がアクアさん」

クリス「立ち話もなんだし、夕食を食べながら再開しよっか。よかったら一緒にどう？」

レン「構わんよ」

酒場の隅にあつた席に座る

ギルド職員「お待たせしましたー！ シュワシュワ四つにオレンジジュース一つ、お

冷一つです！ ごゆっくりどうぞー！」

クリス「じゃあカズマ君。話の続きをしたいところだけど…」

アクアとめぐみんも気になるのか、レンを見つめていた。  
めぐみん「知り合いだったのですか？」

クリス「最近会ったんだ」

レン「まあ……こつちに来たとき頼らせてもらった」

クリス「それでよし。じゃあこの件はここまでにして、そろそろ紹介するよ。彼の名前はレン。漆黒の獅子称される程の腕の持ち主よ」

レン「紹介に預かったガンブレイカーのレンだ……黒獅子と呼ぶなよ……恥ずいから」  
めぐみん「おおっ……！」

めぐみんは赤い目をキラキラと輝かせる。そこで、二人の関係が気になったカズマが自ら質問した。

カズマ「クリスと仲間なんですか？」

レン「違う。あくまで協力関係」

クリス「というわけだから、皆さん自己紹介よろしくっ」

ダクネス「私はダクネス。アクセルの街に住む冒険者で、カズマのパーティーメンバーだ。職業はクルセイダーしている」

カズマ「何サラツと仲間になってんの!? 認めた覚えないんだけど!?」

アクア「アンタまだ反対してたの? 私はもう仲間に迎える気でいたんだけど?」

めぐみん「私もです。護衛担当の方がいれば、私も爆裂魔法が撃てますから。ダクネス、よろしくお願いします」

ダクネス「防御には自信がある。盾役なら望むところだ。何なら囿にして私をモンスターの軍団の中に放置してくれても構わない。ああ……想像しただけで武者震いが……」

レン「(マゾヒスト……)」

めぐみん「次は私が行きましょうっ！我が名はめぐみん！アークウイザードを生業とする紅魔族であり、地に立つ有象無象を塵と化す史上最強の『爆裂魔法』を操る、この街随一の魔法使い！この世を支配せしめんとする魔王を討つべく、横にいるカズマと血の盟約を交わした冒険者である！」

レン「(病人か……)紅魔族でたしか……生まれつき高い魔力と知性を持っている人間で、一定の年齢になると魔法の修行を始めるぐらい魔法に長けた種族か？」

めぐみん「おおっ！よくご存知ですね！」

レン「一応……もと歴史学者なんでね」

めぐみん「貴方からは、私と近い物を感じます。いや、断言します！貴方は、こちら側の者だと！」

レン「……そうか……俺はそうと思わないよ……」



と冷めた目でめぐみんをみる

めぐみん「いえ！貴方はこちらが…」

レン「次頼む」

レンはめぐみんをスルーする

カズマ「あ、…えつと…：…佐藤和真です。こんなナリですけど、魔王倒すために頑張つ

てる冒険者です…：…はい」

めぐみん「自己紹介はもつと大胆にしなければ。そう！私のように！」

カズマ「君からは俺と同じく苦労人の匂いかなー？」

レン「君からは俺と同じく苦労人の匂いがあるよ…」

カズマ「あ…察してくれてありがとうございます。」

アクア「じゃあ最後は私！私はアクア！アクシズ教徒が崇める水の女神、アクア様

よ！」

レン「？アクシズであれか？大佐が地球に落とそうとあれか？」

(ガタガタ)

アクア「ちがうわよ！」

レン「ア●口！地球上に残った人類などは、地上の蚤だということが何故分からの

だ!!」

カズマ「やめろ！てなんでしてんだよ！」

レン「なーんだ：そっちのアクシズじゃないのか…」

カズマ「はい：そんでもってこいつは：女神を自称しているカワイソーな子なんです。自分が女神だと思ひ込んでるイタイ子なんです…：そつとしてやってください」

アクア「ちよつとカズマ！ 誰が自称女神よ!? 私は真正銘女神様なの！まあいいわ。それよりレン！貴方の剣技、中々のものだったわ。で、私から一つ提案があるの」

レン「仲間になるのはお断りだ：駄女神」

アクア「まだ何も言っていないじゃないのよおおおおつ!?てか！サラツといま駄女神で、言わなかった！」

レン「その様子だと大分迷惑かけているようだな疫病駄女神：カズマも大変だな」

アクア「疫病：駄女神!!」

アクアは激昂するがレンにその発言を片っ端から論破した結果隅っこでいじけてしまった

カズマ「レンさん！わかってくれんですね!!」

レン「当たり前だ：」

アクア「この女神たる私が、手を差し伸べてあげているのよ!! それを自ら断るなんてどういう神経してんのよ!？」



受付女「カズマさんのは25個ですね」

カズマ「うしっ！」

レン「やったな」

カズマ「レンさんのおかげですよ」

レン「あくいいのいいの で、クリス俺のはどうなの？」

クリス「レンが斬ってたのって、ほとんどレタスだったみたい」

レン「そうかでいくつよ」

クリス「250個」

アクア「はああああああああアアアッ  
!!!!」

レン「まあそんなところだろうな」

クリス「わかったの」

レン「まあな…経験値稼ぎになるかと思って見分けず斬ったからな…

めぐみん「あのー、レンさんのステータスを見せてもらうことってできますか？」

レン「いいぜ」

カズマ、めぐみん、ダクネスの三人はカードを覗き込み驚嘆した。

めぐみん「な、なんですかこの数値は!? デタラメにも程がありますよ!」

ダクネス「ここまで高いと、特別指定モンスターを討伐できたのも頷ける」

カズマ「俺もこんな数値を叩き出したかったなあ」

レン「俺は昔傭兵もどきしてたからその時の経験が出てると思うぜ」

めぐみん「！スキル…「召喚獣」?!」

レン「この前契約してきた」

カズマ「何召喚できんすか？」

レン「アレキサンダー、シヴァ、イフリート、カーバンクル、バハムートかな」

カズマ「マジすか！羨ましいす…、」

レン「…「召喚」…カーバンクル」

すると地面に穴が空くと額に赤い水晶を持つ狐と兎が交じった小動物が現れる

カーバンクル「なあーにく？レン」

めぐみん「すごいですよ！幻の召喚獣カーバンクルですよ！可愛いですね！」

カズマ「始めてみたわ…」

カーバンクル「誰これ？」

レン「俺の知り合いなんでカズマと…契約してくれないか？」

カズマ「え？」

カーバンクル「いいけど…ステータスとか行けるのかな？」

レン「冒険者だ」

カーバンクル「じゃあ大丈夫そうだね」

カズマ「え？いんすか？そんな！」

レン「本当はカズマは他のやつやってほしいがあいにくこいつしか人と友好的じゃないだ……ごめん」

カズマ「全然いいですよ！」

そうして契約を結ぶ

カズマ「これで俺も召喚できるのかあゝ！ありがとうございます！レンさん！」

レン「いいよ いいよ カーバンクル」

カーバンクル「なにいゝ？」

レン「何か食ってくか？」

カーバンクル「うん フルーツお願いできる？」

レン「おう」

カーバンクルは頼んだフルーツ盛りを食べ尽くすと帰っていった

めぐみんとダクネスは召喚契約は無理でした。理由、カーバンクルと契約するのにス

テータス不足

レン「カズマ君少し表で話さないかい？」

カズマ「？」

二人は酒場の外へ

レン「…お前極東か？」

カズマ「極東…?! え？ レンさんも？」

レン「ああ転生者だと言つても少し違うがな」

カズマ「？」

レン「俺は53で死んだ…だが、こちらに来たとき今は19歳」

カズマ「そうなんです…多分ですけど、転生する時に女神様から…特典を選んでくれて言われませんでした？」

レン「確かに言われたな」

カズマ「じゃ、じゃあ！ その時に選んだのつてもしかして…」

レン「たしかにそうだが…お前の期待する武器とは違う、これは前世ですつと使つていた武器で、技はすべて俺が編み出したものだ」

カズマ「（…あれ？）…！ ならその武器つて、自分の力が全体的にグリーンと上がったります？」

レン「そんな性能はない？ そんなもんがあればお前にくれてやつてるよ」

カズマ「（…あつれー？）」

レン「カズマ君よ…俺の世界では戦いが一般的な世界だったんだよ生きるために修行

をしたし、戦争にも行った。そんで53まで生きた…」

カズマ「わかった…この人は…素が強すぎるだ！」

レンは宿屋に戻る途中

レン「…なんのようだ…気配は消せても…そのドス黒い魔力は消せねえぞ…」

そうして振り向きざまに魔女の首元にガンブレードを突きつける

魔女はレンの首元に杖を突きつける

レン「膠着状態だな…」

魔女「そのようね…」

レン「今日のレンくんはお友達でできたからいい気分なんだ…だからあまり無駄な争い

はしたくないんだけどな」

魔女「ライオンさん…いや獅子の皮を被ったの狩人（バルバトス）さん」

レンは横薙ぎにガンブレードをふるが避けられ距離を取られる

レン「あんたがなぜそれを知っている？」

魔女「貴方の頭の中読ませてもらったのよ…子どもたちを守って死んだの…嘘みたい

ね、」

レン「間接的には守ったから嘘じゃねえよ…それに…ガキどもに俺の死ぬとこなんざ

みてほしくないしな…」



魔女「美しい親心ね」

レン「…おまえ…、一体なにもんだ…」

魔女「さあね…また逢いましよう獅子の革を被った悪魔さん」

そうして消えていく…

レン「あいつ…一体なにもんだ…」

## No. 6 調査完了て、…ええ～…な件

砂漠のど真ん中を走るサイドカー付きのバイク

レン「しつかし：防塵したとはいえ…」

マント着ないといけないとは…

クリス「仕方ないよ：それにしてもサイドカー作るなんて器用だね」

レン「水の樽積むのにいるな…とと思ってさ」

そうしてつけたゴーグルの砂を払う

そうして遺跡につく

レン「エジプトに似てね？」

クリス「そうね…」

レン「遺跡があるということとは街があつたと言えるだろう…」

そうして下車しバイクを虚空倉庫（アイテムボックス）に収納する

レン「しつかしこりやまた便利だな クリスさん」

クリス「ええ、つかってますよ」

レン「タメでいいのにたく…さて…おかしなことにこの遺跡…索敵魔法がどうにも通

らない：なんでだろうな」

クリス「アーティファクトの効果かな」

レン「これはまた嫌な予感がするぜ」

とガンブレードを肩に担ぎ遺跡にはいる

ガンブレイカー：レンの世界においてガンブレイカーは秘されるものであったそのため剣技も独特であり、剣技は後継者となる人物かその弟子にしか伝授されない、その中でレンはその黄金期に活躍した人間であり、黒獅子の革を被った狩悪魔（バルバトス）と恐れられていた。

ガンブレード：刀のような刀身に、銃のようなグリップを併せ持つ、奇妙な武器を継承してきた。特殊なシリンドラーに魔力を込め、引き金を引くことで一気に開放して、刀身より魔法的效果を発揮する

レンたちな長い回廊を歩く

レン「昔は何があつたんだろうな：考えただけでワクワクする」

クリス「学者みたいだね」

レン「できることなら学者になりたかつたさ：ま それを許さなかつたかな俺のいた

時代（世界）ではな…」

クリス「残酷ですね…」

レン「そのおかげで強くなったけど、この遺跡は誰のための城で何があったんだ？」

クリス「ここには王国があつてそこに女王がいたけど…」

レン「謀殺されたか…」

クリス「そう！」

レン「…同情する気にはなれんな…先に進むぞ」

クリス「…」

クリスは思い出していた

クリス「バルバトス…ですか？」

女神？「ええ、あれはバルバトスと称されていたその理由はね、彼が向こう世界で戦争に参加するたびに相手を一人で全滅また壊滅に追い込む力を有していた。でも最後は彼の力を恐れた味方に犯罪者に仕立てられる、彼に付き添った人間は無事にすんだけど…彼を裏切った人間と、裏切りを後押しした相手の将軍は死亡したは…彼と一緒にね…」

そうなることを思い出していた

クリス「…」

レン「何ほうけてんだ？先行くぞ」

そうして大広間に出る…

クリスが進もうとするとレンがガンブレードを抜き遮る

レン「クリス下がってろ…何かいる…」

レンは警戒し大広間の段階を降りる

すると上から何が降り立つその姿はまるで人体に無理やり魔物を融合させそして機械でそいつを制御しているようであった

レン「これはこれは…まるで…無理やりされたみたいだな…それで…その主もいない…暴走きみか…」

クリス「レン！」

レン「くるな！こいつは俺がしとめる」

そうしてトリガーに指をかける

レンは融合モンスターのソニックブレードを発動し手を斬り落とすが、切り落とされた腕はすぐに消滅し直ぐに新しい腕が生える

レン「どうしても暴かれたくない歴史的真相があるみたいだな…」

クリス「どういうこと？」

レン「こいつこの世界のやつじゃねえな…」

クリス「どういうことなの!？」

レン「一つ仮説が浮かんだが後にしよう…（とはいえ、ここは遺跡内部…劣化具合からして大技は出せない）！あれなら！冷刃」

と両手を斬りおとす

融合モンスター「おおおおお！おおおおお！  
!?!?!？」

クリス「再生しない？」

レン「傷口さえふさしまえばこつちもんだ！速攻で仕留めさせてもらうぞ!!」

そうして融合モンスターにとどめを刺そうとする

（くだらないこと志をいつまで掲げ続けるだい…）

レン「!？」

レンは距離を取る

レン「クリス…きこえたか？」

クリス「なにが？」

レン「そうか…そいつは…一生背負っていくもんだよ！このクソ※★○▲野郎！」

レンは融合モンスターに急接近しトリガーを6回引く

とガンブレードに氷をまとわせ強力な一閃である冷刃を叩き込むそして首を跳ねた

…するとすぐに融合モンスターは消滅した

クリス「終わった？」

レン「なあ…こいつ、この世界の存在じゃないな」

クリス「はい このあとどうしますか？」

クリスは口調が、もどる

レン「先へ進もう そこに答えがあるはずだ」

「おいまってくれ」

クリス&レン「？」

振り返ると猫を模したのかお世辞にも可愛くはないステッキが浮いていた

レン「お前…ええ!?名前あんのか？」

セトラ「俺はセトラ あのバケモンに喰われてたんだ…おたくがたおしてくれたのか

いっ？」

レン「おう…」

クリス「…」

レン「すこしまってくれよ」

セトラ「おう！」

レン「あれ…アーティファクトか？」

クリス「いや…あれは違いますね」

レン「そうか…ならいいや…」

レンはセトラをみる

レン「セトラだったか？」

セトラ「おう」

レン「なんで腹の中にいたんだ？」

セトラ「お嬢助けようと人を呼ぼおしたところ…」

レン「言わなくていいさ…だいたいわかった」

セトラ「察してくれてありがとうとよにいちちゃん」

レン「おう で、呼ぼうとしたのは何年前だ…」

セトラ「何年前だって…ついさっきだ」

レン「…申し訳ないがセトラ…お前が食われてから…結構な月日が流れているぞ」

セトラ「!? 本当か！」

レン「ああ…おそらく2000年以上はたってる」

セトラ「…そうか…」

レン「この通りこの宮殿も遺跡になってしまっている。ここの姫さんは自殺したこと  
になってる」

セトラ「！それは本当か」



クリス「うん…残念だけど…」

セトラは下を見る

レン「とりあえず行こう…」

セトラ「？」

レン「とりあえず…俺を王の間につれていけ…そして…誓いを果たせ」

セトラ「…ああ…ありがとよ にいちやん」

レン「お前の気持ちわからんでもないからだ だから…いくぞ」

クリス「でもそう簡単には行かないみたいだよ」

と指をさすと多数の融合モンスターが現れる

セトラ「またあいつらかよ…」

レン「やれやれ…まあ…いいや…全員…殺してやるよ…たとえ暴かれない事実が

あるとしてもそれを…暴くのが…考古学者の務めだ!!」

とガンブレードの刃をむける。と向かってくる奴らを全員殲滅する

セトラ「兄ちゃんほんと強いな」

レン「まあ…場数は踏んできたからな！」

王の間へ

セトラ「…」

レン「踏ん切りをつけにいかう…」

セトラ「ああ」

そうして階段を上がり、ミイラの棺の前でひざまずく

セトラ「遅れてすまねえな…お嬢…助け連れてきたぜ」

レン「レン・ヴァーフアイト…セトラ殿の救援により馳せ参じました。あなたを襲つた者はいませんそして、巢食つていた魔物の退治しました。ご安心してお眠りください」

?「そうですか…」

レン クリス セトラ「はえ？」

レン「いま…、声したよな」

クリス「したね」

セトラ「したな…お嬢の声だ」

レン クリス「呪いか…?!」

レン「…!クリス!開けるぞ!」

クリス「うん!」

そうして棺蓋を開けると中から上品な黒髪が、肩まで伸びて、艶やかな褐色の地肌に類稀なる肢体を有している。女性がいた頭には威厳のあるコブラの冠を頂いている。

胸元には煌びやかな装飾がある。胸元は、角度によっては立っているだけでも乳が見えてしまうような状態

レンは速攻で後ろを向く

メナス「私はアマラ王国の女王のメナス…て、なぜ後ろを向いているのですか？レン・ヴァーフアイト」

レン「いや…そのなんだ…目のやり…」

そして咳払いすると

レン「貴方と謁見直に謁見するのも恐れ多いので、後ろを向いてしまいました。不敬であると思いますがお許しを…」

と向き直り下を見ながら言う

メナス「そのようなことでありましたら許しますうよく」

レン「嘘です！目のやり場に困ったので、後ろ向きしました！ごめんなさい！てかあれつけてないの？わざとか?!わざとなのか?!」

セトラはレンの横に行くとき小声で

セトラ「まあ…正常な反応だよ レンのあんちゃん」

レン「ありがとよ…（嫌な予感 クリスここは適当にはぐらかして撤収するぞ）」

とアイコンタクトをとる

クリス「(わかった　じゃあそうするわね)」

レン「では、私達はこのへんで…」

メナス「…獅子の皮を着た狩悪魔(バルバトス)…でしたけ」

レンは足を止める

レン「…いいえ…私は違いま…」

メナス「いいえ魔女様をそうおっしやいました」

レン「(あいつか…いや…まさか…この女をあの魔女が生き返らせたとも言うのか!?)…俺にどうしろとおっしやるのですか?」

メナス「私の目的はアマラ王国の再興　それにあなたの力を貸してもらいたいんです」

レン「断る!」

レンは立ち上がる

レン「国に関わるなんざ御免被る」

セトラ「お嬢やめとけ」

メナス「なぜですか?セトラ」

セトラ「このあんちゃんに国に取り殺されたような男なんだ…そんな男に国の再興を、手伝わせるなんて、あんちゃんが可哀想すぎる」

レン「…」

セトラ「お嬢にとっちゃ臣下が裏切ったようにあんちゃんは国に裏切られたんだぜ？」

レン「おまえ…なんでそれを…」

セトラ「あんちゃんの頭の中くらいわかるぜ」

レン「それはそれは気をつけないとな…」

と笑うとその場にあぐらをかくと、ポケットから煙管型の吸引器を出し葉を吸う

レン「そろそろ夜だ…ここで飯としようかのう セトラ クリスそこの嬢ちゃんもめしくうか？」

と少しおじさん口調で言う

セトラ「お前さん実はすんごいとし取ってるだろ？」

レン「まあ…それはいいんだよ」

セトラ「クリスの嬢ちゃんいいののか？」

クリス「まあ…レンはいろいろと規格外なところあるからねえ」

そう言つて呆れた笑みをうかべる

レン「わかつたお前だけシチュー抜きな！」

クリス「ひどい！」

ガスコンロと食材をつかい鶏肉のシチューをいつの間にか作っている

レンはシチューを器についでクリス セトラにわたした

レン「あいよ食え食え」

クリス「レンのアイテムボックスで、便利だね」

セトラ「それにしてもこれ上手いな」

お世辞にも可愛いと言ひ難い：猫の杖がシチューをがつつくなんともまあシユールな絵面が：

レン「おいメナス嬢食わねえのか？」

と階段を登った上の玉座にいるメナスは

メナス「供物は持つてきてくださーい」

レン「働かざる者食うべからずだ 欲しけりや動いてこい！」

メナスは頬を膨らませる

レン「セトラ悪いなこればかりは譲れないんだ」

セトラ「お前さんの考え方はごもつともだから、お嬢降りこい！」

メナスは不機嫌そうな顔をして

レン「ほら肉多めにししてやったから機嫌直せ」

とシチューの入ってる器を奪い取るように取りそれを口に運ぶ

メナス「！」

セトラ「どうだ？」

メナス「悪くないですね」

レン「そうか？」

と笑う

メナス「いつぶりでしょうか…誰かとうとうして夕餉を囲むのは…本当は信じたくなかつたんですよ…」

レン「？」

メナス「セトラからきました…国が滅んだことも永遠に続くと思われた我がアマラ王国の栄光は今やどこにないことも」

レン「…はあ…俺さあ…昔全部捨てたことがあるんだ…そしてこいつ（ガンブレード）一本に心血を注いだ、そして無敵とまで謳われた…だが、その先には何も…なかつた…結局何もなかつた…そして俺は国に勧誘され国の犬になつたそこにもなにもない…その後国の作つた孤児院の役員になり先生になつた…俺は孤児院の子達の成長を見続けた成長して巣立つていく、その時やつときづいた俺の生きた証があつたことに、だから俺は孤児院を続けたそしてそいつらを守るために人を殺し続けた…でも結局…俺は…」

とコップに入つたお茶を覗き込んだ…

レン「俺は…信じ続けてきたもんに殺されてしまった…滑稽な話さ 過ぎた人間は結局腫れ物扱いされ爪弾きにされる…」

と笑う

クリス「…レン…」

レン「でもいいだ 俺の生きた証はまだ…生きているそしてまたそいつが俺の生きた証が別のものを生かしてまた、俺の生きた証は増えてそして広がっていく…無駄なことだと思っていたことが、この手一杯に欲しかったものができた出たんだ俺の生きた証は今でもこの手から溢れるくらいに溢れ続けているんだよ。俺は一度死んだ…だが、悔いなんてない お嬢…お前が生き返ったことこそが…、その国があつた証じゃないのか？」

メナス「！私が…」

レンは笑う

レン「さあ…お後がよろしいようで、昔話はこの辺して、食うべえ」と鍋からシチューを注ぐとそれを頬張る

翌朝

クリス「おはよう…レン」

レン「お目覚めか…宮殿のそと見てみるよ…そつとだぞ」



クリスが宮殿の外を見ると多数の融合モンスタ―がいた…

レン「囲まれた感じだな…」

クリス「なんでまた…」

レン「一つおかしい点がある。俺は最初彼奴等をここの守護者と考えただが…今朝奴らの一体を解剖した」

クリス「解剖?!」

レン「そうしたら色素配列とメナスの色素配列を調べたら一致…アマラ人だった…それに嗅覚が優れていることもわかった」

クリス「なるほど…セトラを消化しなかったわけだ」

レン「おそらくだが、あの融合モンスタ―はずつといたことになる…彼女…メナスの棺のある宮殿になぜアイツラがいる?まるで、メナスが生き返ることが予想されてたみたいだ…」

クリス「たしかに…おかしい」

メナス「やっぱりあの怪物共は臣民なのですね…」

と暗い表情をする

レン「…メナス様…介錯任私が…請け負います…」

とレンはメナスに膝をつき言う

クリス「レン…無茶だよ」

レン「無茶でも、殺らなきゃ殺られる…それに…いい加減に解放させてやりてえからな…」

メナス「レン・ヴァーフアイト…臣民の介錯の任を命じます」

レン「謹んで承ります」

レンは宮殿遺跡の入口の階段を降りる。無数にいる融合モンスターであるアマラ人はこちらを見るとレン目掛け襲いかかる

レン「俺は…獅子の皮を被った狩悪魔（バルバトス）だ…」

すると髪の毛が一気に白髪になる。そうして地面にガンブレードをさす

レン「それじゃ…いきますか…」

そうレンは踏み出した瞬間消える

メナス「（…消えた?!）」

次の瞬間周りにしたアマラ人が一斉に凍りつく

レン「痛みは感じないようにしてやるから…安心しろ…」

とトリガーを六回引く

レン「天上天下唯我独尊…ブラステイングドライブ…」

氷属性の極大威力遠距離効果のある大技を目にも止まらない速さで連射する。

レン「安らかに眠れ…おまえたちの無念俺が全部…引き受ける…」  
そうして改造人間にされたアマラ人を全員殺しおえると

クリス「お疲れさまレン」

レン「…」

メナス「大義でしたよ…レンさん」

レン「まだだ…」

レンはそのまま近くにあつた倒れた石柱を担ぐとそれを地面に深々と刺す。レンは  
ミスリル製のナイフで意思に文字をほる

アマラ人慰霊碑

と刻む

レン「せめて…その魂に安らぎを…」

レンは目の前にガンブレードを地面に指すと膝をつき頭を下げる

レン「これでいい…行くぞ…クリス」

と眼の前のガンブレードを抜く

レン「ギルドへは報告書を提出しておこう」

クリス「そうしようか…」

レン「で、メナスさんや君はどうするつもりで？」

メナス「私はレンさんについてきますよ」

レン「は？いや…普通ならクリスだろ」

メナス「貴方は私の臣下なんですから」

レン「なんか、勝手に臣下にされてません?!」

メナス「先程私の前にひれ伏したじやありませんか」

レン「あ…」

と膝から崩れ落ちる

セトラ「まさか…兄ちゃん…」

レン「勢いでやつちまったあああああー!」

メナス「ということだ あなたは今私の近衛隊長にですから」

レン「そんな…ええ…」

スキル 「獅子の皮を被った狩悪魔（バルバトス）」を習得しました。

効果 自身を含めた仲間が圧倒的不利にあつた場合すべてのステータスが30%上

昇

称号 「女王の騎士」と「女王の下僕」を取得しました。

レン「(一つはいいとして一つは悪口だろ…)」

## No. 7 ポーション騒動

あれから3ヶ月たった

メナスが家に来たとき格好が格好だったから色々問題なつたから、服を買って現在どこにでもある格好にさせている冠と胸につけていた飾りは外しています。ちゃんとした服装をしています

メナス「で、どうになりましたかあゝアマラ王国の報告書は」

レン「とりあえず、メナス女王が国と運命をともしたという文は否定を出した。痕跡の証拠をすべて王都の考古学部門に一連の報告書を提出しておいたあとはアイツラ次第だな」

クリス「ひっくり返されないかな？」

レン「現地には証拠が馬鹿みたいにあるだ、アホじゃない限りわかるはずだ」

クリス「うまくいくかなあ」

レン「うまくいくようにこういうことを報告してやった」

そういつて報告書の写しを渡す

メナス女王の遺体があると言われた棺には、遺体があつたとされる痕跡はなく、史実

通りに丁重に埋葬したとあるがそのような事實はなかった

クリス「なるほど」

レン「それにこちらの史実にはおかしな不自然な点がいくつも見受けられたそこついでやったから、認めざる得ないだろう　あとギルマスとセトラが向こうに行つてゐるからひっくり返されることは…無いだろう…」

そう言つて立ち上がるとの書齋の窓から外をみる

レン「さて…クリス少し出てくるぞ」

クリス「?どこに行くの?」

レン「カズマの稽古だ」

高原にて

カズマ「カー君!リフレク!」

と魔法のバリアをはる

レン「だいぶ慣れたな」

カズマ「はい　お陰様で!」

レン「お前みたいな弟子か親友または息子いたらな、出来の良さに誇らしく思えるぜ」

カズマ「そんな照れるぜ!」

レン「本当さね…そのうち俺のこのガンブレード、お前に託そうとも思っちゃまうぜ」  
カズマ「え！そのめちやつよ剣をですか?！」

レン「ああ…ああでもこれ使えるのに20年かかったからなあ…今度お前にあったガンブレードを試作してみるとしよう」

カズマ「レンさんがいてよかつたぜ！」

レン「生き抜くために教えてんだ。これをお前がまた…そのすべてを誰かに教えてやってくれよ」

とレンは笑うそういつて竹で作った水筒を渡す

カズマ「そういえば…レンさんデリバリーサービス始めたんだな」

レン「ん?ああでもまあ…と言っても何でも屋なんだけどな、剣術や戦闘面の指南も範疇に入れてる」

カズマ「すごいですね」

レン「とりあえずこの世界で生きてくんだ食い扶持くらいはさ…内にあのわがままお嬢様いるし…」

レンは遠い目をする

カズマ「あ…(察し)」

そうしてレンは家へ戻る。レンの家は一回に事務所を起き2階部に自宅スペースを

おいている。が、レンはほとんど事務所にいる

レン「職業病か…はあ…」

そのため息をつき首を鳴らし、そして目の前にあつた本を、よむ

レン「なにになに？誰でもできるポーションの作り方？」

1 薬草とはちみつを混ぜ、解熱剤を作る

2 解熱剤に秘薬を混ぜ練成版を用いて解熱剤の色透明に変わるまで魔力を注ぐ

3、完成

注意 魔力の注ぎ具合によつてはハイポーションが完成する場合と質の悪いポーションができる場合がある

レン「まあ…そうだろうな とりあえず作つてみるか…」

とりあえず作つてみたが、

レン「なんか透明度が高すぎるような…」

カズマ「あれ？レンさん何してんすか？」

レン「おおカズマ…ポーションを錬成したんだが…失敗したかもしれないのだ…」

カズマが、五つのビーカーに入ったポーションを見る

カズマ「これ…ポーションなんすか？なんか水みたいすけど」

レン「俺もそう思つたんだが…鑑定士に見え貰えば一番なのだがなあ…あ…いいやつ



がいたわ」

ということでもクリス召喚

クリス「これ…ポーション…なんだよね？」

レン「そのつもりで作ったんだが…どう見ても水にしか見えないよな？」

クリス「うゝん 一つ可能性があるとしたら、ハイポーションより上の階級のやつを作っちゃたんじやないの？」

レンとカズマ「は？」

クリス「だって、レンの魔力は底なしなんだよ？」

レン「…うなことないだろ」

クリス「じゃあなんであのバイクに乗れてるの？あれ…魔力を添加して走ってるんでしょ？これは予想だけどレンはバイクに乗ってるうちに魔力の操作とかそのへんが鍛えられたんじゃないかな」

レン「そんなことが…あのか？」

クリス「うん 普通にあるよ多分これはレン自身がそう言う鍛錬癖がある身体であることが要因にもあると思うよ、それよりもこの…水みたいなの…ポーションは何かだのね」  
レン「実験体にいいのかわかるが…あいつ（ダクネス）にここに来てほしくは無い…」  
クリス「じゃあどうするの？」

レン「取り敢えず、ギルドに依頼申請してくるわ」

依頼申請を出し店へ戻るそして…に3日後、ギルドを通じて手紙が届くが手紙の封筒に書かれていたのは…王家の紋章が刻印されていた、レンはすぐにクリスとカズマを呼び出す

カズマ「国から…」

レン「ああ…」

クリス「レン何したの?!」

レン「俺に聞くなよ!」

三人は息を呑み手紙の封筒を開ける

レン「…この度…レン・ヴァーフアイト殿の生成したポーションは極めて高品質に加え、使用者に身体能力上昇とその他不明の上昇効果が見られた。その為王家で貴公の作製したポーションを買い取らせていただいだああ?!」

カズマ「王家が買い取る?!」

クリス「まだ続きがある?」

カズマ「え なになにに…これらのポーションは王国的な力に多大なる増強効果が見られることから…5億エリスを支払い、貴公に与える、て…」

カズマとレンは目をギョツとして顔を見合わせる

カズマ&レン「まじかああああああああああ!!!」  
カズマ「え?!え?!5お…」

レンはカズマの口を塞ぐと一同店の扉を開け外を見渡しは人が聞いていないことを確認し、開店中の札を臨時休業の札に変える

カズマ「どうするよ!レンさん!5お:だぜ?!」

レン「放棄したいけど:これも来てるからなあ」

と5億エリスと書かれた小切手を見せる

レン「とりあえず:この小切手は:そうだ!お前ら!これ分けるぞ!」

カズマ&クリス「え?!」

レン「二人に1億ずつ渡す」

クリス「なんで?!」

レン「そのほうが後腐れなくていいからだよ!いいか?!お前ら!これは俺たち3人だけの秘密だ?!」

カズマ「口止め料でことか?」

レン「そう捉えたかったらそうしろ!いいかこれはあのバカ3人にもバレちゃいけねえ、もちろん他の部署のやらにもだ」

クリス「わかった!」

カズマ「り…了解！」

後日、金を受け取った店にいたクリスに渡した。カズマの、分は分けて保管しているカズマ「アイツラには…黙っとかねえと…」

レン「必要分だけその都度取りに来るといいさ、君の分は嚴重に保管してるから、あとこれうちに置いとくから」

と言つてダイヤル式の金庫を見せる。

レン「パスワードは絶対忘れないこと！いいね！」

カズマ「お 押忍！」

するとメナスが現れレンの金庫を勝手に開けると買い物へ向かっていった

レン「…一応…バレるとああなるからな？」

カズマ「は…はい…」

レンは秒でバレた…